

## 論文内容の要約

論文名	Relationship between Alcohol Drinking Pattern and Risk of Proteinuria The Kansai Healthcare Study 飲酒パターンと蛋白尿発症リスクの関係：関西ヘルスケアスタディ
氏名	上原 新一郎
<p>【目的】 飲酒パターンと蛋白尿の発症との関係を前向きコホート研究にて検討した。</p> <p>【対象】 対象は2000年に定期健康診断を受けた40-55歳の男性のうち、糖尿病のない、推算糸球体濾過量が60 mL/min/1.73 m<sup>2</sup>以上で、蛋白尿を認めず、高血圧の治療を受けていない9154人である。</p> <p>【方法】 問診票により週当たりの飲酒日数と飲酒日のアルコール摂取量を得た。週当たりの飲酒日数は、1-3日と4-7日の2群に分類した。飲酒日当たりのアルコール摂取量は、0.1-23.0、23.1-46.0、46.1-69.0、69.1 ≤ (gエタノール) の4群に分類した。飲酒パターンは週当たりの飲酒日数と飲酒日のアルコール摂取量の組み合わせにて定義した。「連続蛋白尿」発症は、毎年の尿検査(試験紙法)で蛋白尿1+以上を2年連続認めたものと定義した。解析はコックス比例ハザードモデルを用いた。共変量として、登録時の年齢、BMI、喫煙状況、運動習慣の有無、高血圧症の有無、空腹時血糖値、推算糸球体濾過量で補正した。</p> <p>【結果】 81147人年の経過で385人の連続蛋白尿の発症を認めた。多変量解析の結果、週当たりの飲酒日が4-7日で飲酒日に0.1-23.0 gエタノール摂取者は、非飲酒者と比べて、連続蛋白尿発症リスクの低下を認めた(多変量補正後のハザード比0.54 (95%信頼区間0.36-0.80))。一方、同頻度で飲酒日に69.1 gエタノール以上の摂取者は有意に連続蛋白尿発症リスクが高かった(1.78 (1.01-3.14))。また、週の飲酒日が1-3日の摂取者の結果は、週の飲酒が4-7日の摂取者の結果と同様の傾向であったが有意差を認めなかった。</p> <p>【結論】 飲酒日のアルコール摂取量が0.1-23.0 gエタノールの頻回飲酒者は最も蛋白尿の発症リスクが低かった。一方、頻回の多量飲酒者は蛋白尿の発症リスクが高かった。</p>	